



平成19年度 キャリア教育講演会

◆第1回キャリア教育講演会

全学年・職員・保護者対象

1. 日時 平成19年6月20日(水)
2. 講師 池田香代子氏(作家・翻訳家) [※池田香代子氏プロフィール](#)
3. 演題 「100人村から見えること」
4. 講師紹介

ベストセラーとなった『世界がもし100人の村だったら』の再話を手がけた作家。その印税で「100人村基金」を設立し、“基金を必要としている世界中の人たち”に支援活動を行う。また、アフガン難民キャンプ内の女子校も支援。専門はドイツ文学翻訳・口承文芸研究。世界平和アピール七人委員会メンバー。

1948年東京生まれ。ドイツに留学。帰国後は、早稲田大学や中央大学などで非常勤講師をつとめる。2001年 米国の環境学者ドネラ・メドウズのコラムがインターネットに流れ、受けとった人々により加筆されたメールを修正・再話。『世界がもし100人の村だったら』として出版し、ベストラーとなる。2006年、『世界がもし100人の村だったら』パート4を出版。日本口承文芸学会・日本文芸家協会所属。



5. 講演要旨

講演の始めに、先生の高校時代の経験をもとに[“好き”という気持ちを大事にして、好きなことに対して決してあきらめないこと。]「職業とは“職”(収入は度外視してでも夢中になれること。)と“業”(経済的自立のための仕事)の2本立てで考えたほうがよい。」といったメッセージをいただきました。

先生は『世界がもし100人の村だったら』の印税をもとに立ち上げられた「100人村基金」を通じて NGOや難民申請者の支援を行っておられ、ご自身がネパールを訪問された経験から、教育の重要性とそれを運営する国の責任について強調されました。また、エネルギー消費の面から言っても地産地消、自給率向上は日本に

とっての大きな課題であることをわかりやすい言葉でお話してくださいました。

最後に、「死んだ男の残したものは」のBGMIにのせて『世界がもし100人の村だったら4 こども編』の朗読をされ、子どもには「知る権利」「自分の意見を言う権利」があり、大人はそれに耳を傾ける義務があるということ。「fairtrade」のチョコレートの例を通じて、この世界を変えていけるのは消費者であること。何が本当かを見極める力を持つこと等、私たちが自分の生活について見つめ直すきっかけとなるお言葉を多くいただきました。「think global」「act local」の重要性を身をもって実感する講演会となりました。

◆「第2回キャリア教育講演会」

全学年・職員・保護者対象

1. 日時 平成19年11月26日(月)
2. 講師 長田 渚左(おさだ なぎさ)氏(ノンフィクション作家)
3. 演題 「スポーツを通して知る“人間・夢・人生”」
4. 講師略歴

桐朋学園大学演劇専攻科卒業。わが国における女性スポーツキャスターの草分け的存在。海外レポーターを経てフジテレビ系スポーツキャスターとしてブラウン管に登場し、ニュース界においては異例とも言える10年の長きに渡ってキャスターを務めた。この間、雑誌、新聞にスポーツノンフィクションを連載。最近では、活動の場はスポーツ界だけにとどまらず日本ペンクラブ「言論表現委員会」でも活躍。また、日本衛星放送WOWOWの番組審議会委員として、放送文化の現状に関する積極的な発言も多く、スポーツの世界をジャーナリストティックに取り上げて社会からも注目されている。日本女子柔道クラブの理事を務め、オフィシャルコメンテーターとして日本柔道界に働きかけるその手腕に評価も高い。現在、立教大学講師、2003年より早稲田大学スポーツ科学部講師。

5. 著書

『「北島康介」プロジェクト』・『スポーツで育てる－浜口平吾＋浜口京子、山本都栄＋山本美憂＋山本聖子、高橋正＋高橋みゆき』・『欲望という名の女優 太地喜和子』・『こんな凄い奴がいた－技あり、スポーツ界の寵児たち(文春文庫)』・『狼はまだ、夢の中－挑戦者たちの肖像』・『おまえは、風か』・『こんな凄い奴がいた』・『30代OLバイブル 幸せの見つけかた』・『フェロモンな男たち－長田渚左のトークフェスタ』・『おまえは、風か』等多数



6. 講演要旨

女性スポーツキャスターの先駆者といえる長田渚左氏を迎えての講演会が本校第一体育館で行われた。「スポーツを通して知る人間・夢・人生」をテーマに、水泳の北島康介選手や、柔道の山下康弘氏など一流スポーツ選手のもつ影の才能や、長田氏自身がチャンスを掴んだきっかけなど、だれもが夢を掴むチャンスもっていることを力強く語っていただいた。長田氏によると、チャンスを掴む才能は、表に見えるわかりやすい能力以上に、一見わかりにくいメンタルの強さだという。北島選手は特にその才能があり、東京スイミングスクールの選手時代、一番速い選手ではなかった北島選手が、本番で次々にベストタイムを更新する強さに注目した平井コーチのもと、自分の限界を作らず、言い訳をせず、常に貪欲にその場の環境に応じて自らの最大限の力を発揮する才能があったという話が大変印象に残った。北島選手も長田氏も、自らの目標を実現するために、周囲から求められることに対して「できない」といわず、自分の限界を作らず地道な努力を重ねてきたことで現在の地位をつかみ取ったように感じた。自分の可能性は、自分で広げること、スイートスポット(これはできないという限界の範囲)を広くし、簡単に諦めないことの大切さを教えていただいた。長田氏は、時には壇上から降り、生徒に次々とインタビューをするなど、スポーツキャスターの一面が垣間見え、会場全体が一体化した講演会であった。

◆「第3回キャリア教育講演会」

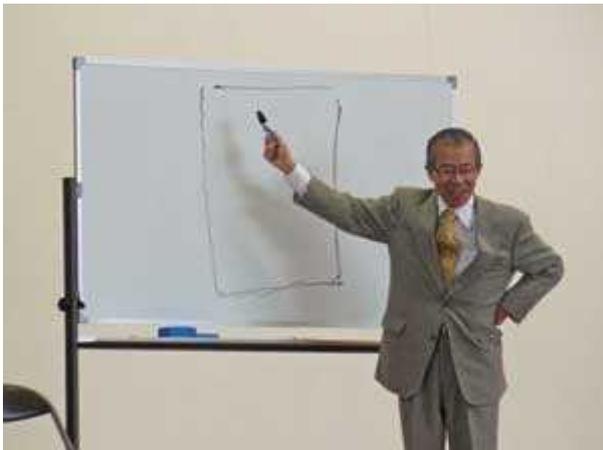
1. 2年・卒業生・職員・保護者対象



1. 日時 平成20年3月21日(金)6・7限(14:30～16:10)
2. 講師 上甲 晃(じょうこう あきら)氏 (志ネットワーク代表)
3. 演題 「自己変革のすすめ 自分から変わる勇気」
4. 講師プロフィール

1941年大阪生まれ。京都大学教育学部卒業後、松下電器産業に入社。1981年、財団法人松下政経塾に入職。教務部長、塾頭、副塾長、常務理事を経て、1995年退職。現在はこれまで培った経験を活かして、「志ネットワーク」を設立し、代表に就任。これからの時代にマッチした教育をさらに追求。“志の高い国づくり”は、日本人一人ひとりが志の高い生き方をすることから始まるとの考えに立ち、1996年4月から、「青年塾」を創立。“人材教育のあり方”“松下幸之助に学ぶ”“自己変革のすすめ”“教育の基本は「愛情」である”。

5. 講演要旨



「自分の名前、『上甲』がいつも読み方を聞かれるので、『上田』という姓にあこがれていた」というユーモア溢れる話から講演が始まる。「甲・乙・丙」の中の「甲」よりも上である『上甲』という名前から、さぞかし成績が良いのだろうという風に言われてきたそうである。その名の通り、一家はほとんどが教師をしておられるようで、自身も教育学部を卒業されたが、教員免許を取らずに松下電器産業に入社をした。「立派な指導者・政治家を育てる」のスローガンのもと、松下政経塾が結成され、そこで長年塾頭として培った経験をもとに、以下の話をされた。

【自分の頭で考える】

松下幸之助が月に一回、泊まりがけで松下政経塾に指導に来た時のエピソードである。身の回りの世話を塾生にさせた所、「座布団の出し方が前後反対である」という指摘をされた。「1000人に1人の本物を見抜く人の目を常に意識しなくてはならない」ということであった。特に、座布団に残後左右があるとは、多くの生徒が知らずに、ホワイトボードに書かれる図面を食い入るように見ている。

また、ある日松下幸之助は、アメリカの未来学者ハーマン・カーン氏が来日されることを、秘書に告げ、「君、ハーマン・カーンがどんな人か知っているか？」と尋ねた。秘書は、自分が知っているだけの情報を伝えた。翌日、松下は全く同じ質問をした。その翌日も。その時、秘書は、「自分の答え方に不備があるのだ」ということによく気づき、図書館に行き、カーンのことについて調べ、その結果を4日目に同じ質問をされた時に伝えた。自分で問題に気づいたことが大きいとこの秘書は後述したそうである。

【誰よりも早く起きて、自分の身の回りをしっかりと掃除をすること】

「エリート中のエリート」があつまる松下政経塾の最初に松下幸之助が述べた言葉である。イエローハットでの掃除改革では、「心を磨くためには、まず見えるものをしっかりと磨かなくてはならない」ということを話をされる。

『流汗悟道』

北海道家庭学校(罪を犯した少年の更正施設)の話。意味は「汗を流せば物事の大事なことが分かる」ということである。母牛が仔牛を出産する場面に遭遇し、生徒たちが難産の母親を助け、出産の大変さ、命の大切さを身をもって体験することで、後の作文の中に、心の変化が現れたという話であった。

その他、水俣病の母親を持つ杉本さんの話では、『他人を自分の思うように変えることはできない。自分が変わるしかない』という奥深い話を紹介される。また、『平凡な人間にできる一番すごいことは、継続である』ということ、『誰もやらないならば、せめて私ぐらいは…』という気持ちを持って行動をすることが、心を磨くことに繋がるのだという話をされた。

人間教育に携わる上甲先生の語り口は非常にソフトで、人を引きつけるものがあった。生徒たちは、身近な例を豊富に取り入れた講演だっただけに、興味を持って聞き入っていたようだった。